



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	井出策夫・澤田裕之編: 『地域の視点』文化書房博文社, 2004, 196p.(書評)(fulltext)
Author(s)	上野,和彦
Citation	学芸地理(60): 58-59
Issue Date	2005-00-00
URL	http://hdl.handle.net/2309/87473
Publisher	東京学芸大学地理学会
Rights	

書評

井出策夫・澤田裕之編:『地域の視点』文化書房博文社, 2004, 196p.

「地域」は地理学の基本的な分析概念であると同時に研究対象としての実体「地域」という二重の意味を持つ。地理学を学ぶ者にとって「地域」概念をどのように操作し、そして「地域」をどのような視点から把握し、どのような問題を発見し、どのような順序で記述するのか、まさに古くからの、現代的な地理学的課題である。本書はそれに挑戦したものであり、構成は、以下の通りである。

はしがき

- 第1章 地域・地域性
- 第2章 自然環境と人間生活
- 第3章 都市地域の諸相
- 第4章 農村地域の諸相
- 第5章 地域の開発と活性化

はしがき(井出策夫・澤田裕之)は、国際化・情報化が進展する中で、「地域」理解の重要性を説き、本書の目的を示す。

第1章(井出策夫)は、地域の概念について各種地理学辞典や地理学者の定義について紹介している。そして、地域が注目された背景について、中央と地方、過疎地域、農業地域の諸問題を取り上げて説明し、最後に地域の自立的な動きを示す事例としてまちづくり・むらおこしを取り上げている。さらに、地域の基盤となる風土論・環境論、そして地域をテーマとする諸分野の動向について言及している。

第2章第1節水と文化(環境)地理(河野忠)は、人間生活における水環境の関係を捉え、人間はその地域性に応じた様々な水の文化を培ってきたことを、井戸の変遷、乾燥地域と湿潤地域による水文化の違い、名水の話来歴とその科学的根拠について述べている。第2節(澤田裕之)は、乾燥地域の自然—水環境—と人文活動を中央アジアやナイル川のオアシス農業、遊牧民生活、アメリカ合衆国グレートプレーンズなどの灌漑農業を事例に記述している。

第3章第1節(石動志乃夫)は、都市地域が変化

していく諸相として、地方都市・秋田の都心商店街の変容を郊外商業地と対比させながら、地域問題化する地方都市の課題について述べている。他方、大都市の都心商業地の再生を銀座、青山・原宿等の欧米系ブランドショップの立地展開と六本木ヒルズの再開発を取り上げ、ブランド商品のみならずファッション情報を含めた都市文化を発信する場として再生しつつあることを指摘している。第2節(吉本勇)はブリスベン(オーストラリア)における中心商業地としてのショッピングモールと大型複合商業施設、郊外の大規模複合商業施設の立地上の特徴や業種構成の差異について述べている。

第4章第1節(助重雄久)は、近年の輸入野菜の増加に伴う国内農業の変化と農村の対応形態を示し、コストダウンおよび「地産地消」といった取り組みについて紹介している。第2節(小川護)は、自然的・歴史的環境の異なる沖縄農業を取り上げ、次第に本土向け産地が形成される過程を紹介している。第3節(崎浜靖)は沖縄の村落形成を耕作地・屋敷地地図、景観を使って紹介し、歴史地理学のアプローチの有効性を示している。

第5章第1節(上江洲薫)は地域開発の事例として観光産業と観光地形成を取り上げ、観光地域のいくつかの類型を示しながら、観光開発がもたらす地域経済、自然環境への影響を指摘している。そして、これからの持続的な観光のあり方としてグリーンツーリズム、エコツーリズムを紹介している。第2節(崎浜靖)は地域活性化の諸問題として、農山村地域の活性化が最重要課題であると指摘し、これからの農村の役割と資源の見直しや農村と都市との交流を通じた具体的な活性化事業の事例紹介や地域振興政策が提唱されている。

以上、本書は、編著者を含む10名の地理学者による「地域」に関する論考をまとめたものである。各章節は執筆者の専門性と地域に対する興味・関心(『地域の視点』)が示されている。評者の読後感は以下に示した。

それは本書の対象となる読者が「誰か」である。本書が各章・節にかなり入門的知識を記述していることから見ると、大学の一般教育ないし地理学初心者が想定される。一方、本書は「はしがき」にもあるように、統一的な「地域の視点」を提示している訳ではなく、各執筆者それ

ぞれの視点による地域描写であり、『読者は「地域の何を知るために、どのような視点でみるか、どうする方法でみるか、それで何が分かるか。」の参考にして』(5ページ)ほしいという。しかしながら、本当にそれが地理学初心者にも可能であろうか。「地域という地表空間の認識は、きわめて多様で複雑である」(4ページ)からこそ、何をどのような方法で見ることが地理学的であり、地域理解に接近することができるのか。「地理学的思考の面白さ」を強調するためには、少なくともどこかの章節で地理学的思考の手続きに従った事例を示してほしかった。

地理学を取り巻く環境はますます厳しい状況にある。今日、高等学校における「地理」の履修選択者は減少する傾向にあり、大学における教養科目としての地理学のカリキュラムおよびシラバスの見直しを迫られている。また、大学教育・研究組織において研究室あるいは教室から「地理学」という名称が消滅する傾向があり、地理学は国・自治体・企業の地域戦略などの政策決定に対して貢献度が低いと見られている。地理学者が感じる「面白さ」に普遍的な意味を持たせるためには、「地域の視点」を具体的に展開する方法論的独自性やその教育プログラムが問われていると、自戒している。その意味で、本書は多様な素材による「地域の視点」を学習できる書である。一読をすすめた。

(上野 和彦:東京学芸大学)

石黒 耀:『死都日本』講談社、2002、520p.

2004年は災害に明け暮れた。多くの風水害、浅間山の噴火、新潟中越地震、そしてスマトラ沖地震と巨大津波。2005年も福岡県西方沖地震が発生し、全国の地震動予測地図が発表されるなど、災害に対する認識が高まりつつある。防災意識を高めるためには災害を良く知り、災害に対するイメージを育てることが大切である。私も2004年7月福井水害の現場に遭遇し、貴重な体験をした(青木、2004)。しかし、実際に災害を体験することは稀であり、体験してからでは遅いことも事実である。その意味で教育の力は大きい。しかし教科書の記述は「正確」だが「イメージ」が伝えきれないことも事実である。教

科書と文学作品の記述を元に高校生に絵を描かせた沢辺(1986)は、文学作品の方がより実際に近い地形のイメージを伝達させていることを指摘している。防災意識を高めるためには災害が起こったときに自分がどのような状況に置かれるのかという「正確な知識」と「イメージ」を持つことが重要である。その観点から防災教育への文学作品の導入は有効な手段だろう。

一方で、災害を題材にした作品にはパニック小説が多く、緊迫感を高めるため学術的には荒唐無稽な描写が多々ある。これはいたずらに恐怖感を抱かせると共に、誤った知識を伝えることになる。この意味で『死都日本』は、ほぼ完全な学術的知識に基づいて描かれていると共に小説としても優れている(第26回メフィスト賞受賞作)という意味で希有な存在である。中学生には少し難しいかもしれないが、高校生ならば十分に読みこなせるだろう。

『死都日本』が扱っている災害は火山噴火である。その中でも1万年に1回程度しか発生しない巨大噴火(本書の中では「破局噴火=近代国家が破滅するほどの規模の爆発的噴火」)をテーマとしている。九州の加久藤カルデラ(霧島火山)が巨大噴火を起こし、日本と世界が大混乱に陥るという設定である。その様子を一人の火山学者を通して描き出している。小説であるので詳しい内容は書かない。ぜひ読んでほしい。

実際に日本列島では過去12万年の間に9回の巨大噴火が発生している。鹿児島島のシラス台地は始良カルデラによる巨大噴火(26,000~28,000年前)の産物であり、7,300年前には喜界カルデラが最新の巨大噴火を起こしている。そしてこれ以降、地球人類はこの規模の噴火を経験していない。巨大噴火では成層圏に達した火山灰で地球全体が覆われ、「火山の冬」が引き起こされる。現在の地球で発生すれば途方もない被害が生じるだろう。本書ではその噴火の様子や被害などが、正確かつイメージ溢れる描写で描かれている。特に噴火時に発生するさまざまな自然現象については火山の専門家がお墨付きを出す程の正確さであり、この小説を題材に2回の学術シンポジウムが開かれた程である(詳細は「日本火山の会」HPへ)。

浅間山・有珠山の噴火や水害などは、超巨大